

## 『朝鮮人BC級戦犯の記録』

2015年09月25日

恵泉女学園大学名誉教授の内海愛子氏は1982年に『朝鮮人BC級戦犯の記録』を著している。読んで衝撃を受けた。朝鮮の若者たちが日本の戦争に駆り出され、戦後、戦犯として死刑になり、生き残った方々も過酷な生涯を強いられた。それに対し、日本政府は責任を取らず、放置し続けた。内海氏は、この実態を調査し、生き残った方々を追跡して聞き取り、上梓している。深い感銘を受けたので、内海氏の話を知りたいたいと、横浜港南台教会の平和聖日の講師にお招きし、「憲法九条はアジアの共有財産」と題して講演をしていただいた。九条は悲惨な戦争体験から非戦を決意した日本の憲法であるが、アジア諸国を蹂躪したことへの謝罪を含めた「アジアの共有財産」であると話された。

戦後70年を期して、『朝鮮人BC級戦犯の記録』が「付録 植民地責任への問いかけ」と「岩波現代文庫版あとがき」を加え、今年の7月に再版された。再版本を読み直し、日本は朝鮮人戦犯の存在を知り、彼らへの責任を取るべきであると痛感した。

1910年の日韓併合による植民地化以来、日本はあらゆる面で利用し、収奪してきた。戦争が激化し、労働力が不足するようになってから、強制労働をさせるために徴用、連行が大幅に増えていった。軍人になった人もいるが、軍属として徴用された人は3,000人を超える。彼らは外地で捕虜監視の仕事させられた。映画『戦場にかける橋』で有名になった泰緬鉄道建設には米兵、英兵、オーストラリア兵たちが従事させられた。過酷な労働と食料不足、気候が悪い中でマラリア、赤痢などの病気で死者は続出した。捕虜になった日本兵の死亡率は数%であったのに対し、外国兵捕虜の死亡率は27%であった。いかに虐待したかが分かる。朝鮮人軍属は、外国人捕虜の監視と強制労働の監督の役に当てられた。無垢な彼らは皇国史観教育をたたき込まれ、また、日本軍の連勝を見て、日本人になり切ろうとした。彼らは、戦陣訓「生きて虜囚の辱めを受けず」と、捕虜になる屈辱よりは死ねと教えられたが、激戦を戦った者として、気高く振る舞う外国人捕虜の姿に驚いたという。日本兵からは軍馬、軍犬に劣ると蔑まれながらも、教えられ、命じられたように、捕虜たちを殴る、竹の棒で叩くなどして、労働を強いて、虐待した。

戦後、その虐待が戦争犯罪に問われた。首実検され、激しい憎しみを受けた。戦犯に問われた朝鮮人は148名で、23名が処刑された。多くがタイ、マレーシア、ジャワなどの捕虜収容所の監視員であった。隣の処刑室から「バンザイ」の叫び声や、ガシャンと吊るされる音を聞いて、自分の番を待ったという。朝鮮人でありながら、日本軍属として徴用され、戦犯となり命を落としていく彼らの無念は計り知れない。

BC級戦犯の裁判は日本、アジアの各地49ヶ所で行われ、5,600人が裁かれ、約1,000人が処刑されている。極めて杜撰な裁判であったと言われているが、感情的に扱われたことは容易に想像できる。朝鮮人戦犯で刑期刑を受けた人の中で、日本に送還され、巣鴨で服役した人々がいた。講和条約が締結された時、日本軍のために働かされた朝鮮人たちは、外国人とされ、軍人恩給、傷病手当金などの保障の枠外に置かれた。ところが、戦犯は朝鮮人であっても外国人とは見なされず、日本軍の戦犯扱いをされ、拘留は続いた。彼らは順次、保釈されていったが、涙金を受け取っただけで、知人もない日本に放り出され途方に暮れた。自殺した人が何人かおられる。謝罪と補償を求め、裁判を起こしたが、「日韓条約」によって解決済みとされた。韓国では日本の戦争協力者として見なされ、彼らの立つ瀬はない。残された数人が、戦後70年の今も謝罪と補償を訴え続けている。彼らの悲痛な訴えに、謝罪を含めて聞いて、応えるべきである。